

武蔵野日曜集会

天来の使者

――ヨハネ伝第8章21～30節――

1994年12月11日

小池辰雄

我は上より出づ 霊現の世界 天来の使者

【ヨハネ8・21～30】

21 斯^かてまた人々に言い給う『われ往く、なんじら我を尋ねん。されど己が罪のうちに死なん、わが往くところに汝ら来ること能わす』²² ユダヤ人ら言う『わが往く処に汝ら来ること能わす』と云えるは、自殺せんとてか』²³ イエス言い給う『なんじらは下より出で、我は上より出づ、汝らは此の世より出で、我はこの世より出でず。²⁴ 之によりて我なんじらは己が罪のうちに死なんと云えるなり。汝等もし我の夫^{それ}なるを信ぜずば、罪のうちに死ぬべし』²⁵ 彼ら言う『なんじは誰なるか』 イエス言い給う『われは正^{ただ}しく汝らに告げ来りし所の者なり。²⁶ われ汝らに就きて語るべきこと審くこと多し、而して我を遣し給いし者は真なり、我は彼に聴きしその事を世に告ぐるなり』²⁷ これは父をさして言い給えるを、彼らは悟らざりき。²⁸ 爰^{こゝ}にイエス言い給う『なんじら人の子を挙げしのち、我の夫^{それ}なるを知り、又わが己によりて何事をも為さず、ただ父の我に教え給いしごとく、此等のことを語りたるを知らん。²⁹ 我を遣し給いし者は、我とともに在^{いま}す。我つねに御意^{みこころ}に適^{かな}うことを行^なうによりて、我を獨^{ひとり}おき給わす』³⁰ 此等のことを語り給えるとき、多くの人々イエスを信じたり。

●我は上より出づ

聖書で――旧約聖書からずっとですが――「知る」という言葉は知的に知ることではない。全人格的に受けとることを「知る」という。いわゆる頭で知るではない。

今日はヨハネ伝8章21節から『天来の使者』と題してお話します。「天来の使者」とはキリストのことです。

21 斯^かてまた人々に言い給う『われ往く、なんじら我を尋ねん。されど己が罪のうちに死なん、わが往くところに汝ら来ること能わす』²² ユダヤ人ら言う『わが往く処に汝ら来ること能わす』と云えるは、自殺せんとてか』²³ イエ



ス言い給う『なんじらは下より出で、我は上より出づ、汝らは此の世より出で、我はこの世より出でず。』

「我は上より出づ」

という。キリストは「自分は上から出てきた者だ」という。彼は時間的にも、

「我はアブラハムよりも先にありしなり」

と別なところで言っておられる。

「お前さんはアブラハムを見たのか？」

なんて、馬鹿な質問をするユダヤ人がいた。そのことは57節に出ている。イエスの自覚は、神と共に歴史の初めから、歴史以前から居られるという凄い自覚です。永遠者です。そして、歴史上に現れた。ナザレのイエスとして我々と同じ人間の姿で出現した。そんなこと言えるひとはキリストの他にいない。だから、もちろん普通の人間ではないわけです。

イエスの生まれた頃のローマの皇帝はアウグストウスですが、これはその世界の第一人者といわれる。ところが、キリストは第一人者でもない、これは唯一者です。一、二と数えることができない、順序の中に入っていない、唯一の例外者です。アブラハムよりも先に神と共にいたひとがナザレのイエスとして現れた。キリストの降誕というのは大変なことです。そういう霊的な存在が我々と同じ姿で現れた。同じ姿で現れたけれども、彼には聖霊が宿っている。聖霊が宿っているから、その言うことが為すことがケタが違う。

「自分が今度は天界に行ったら、お前たち、祈って待っている。聖霊がやって来るから。そうしたら、私の言ったり為したことが本当の意味で分かるぞ」

と、終りの方でキリストは言われた。だから、聖霊を受けなければ、キリストの言葉は本当は受けとれない。キリストの行為も受けとれない。

普通はよく「聖書の研究」といって、一生懸命に研究している。研究なんかで聖書は読めるものではない。これは御霊の光でもって読まなければ読めない。御霊の光の土台は十字架です。キリストの十字架の贖いを本当に受けなければ聖霊はこない。十字架と聖霊は分けることができません。これは必ず、その土台と完成ということになる。十字架・聖霊、それから再臨となる。

だから、

「我は上より出づ」

という。「上より出づ」なんて言ったって、彼らは分からない。「上」というのはただ空間的な上ではない。次元的な上から、絶対次元からやってきたということです。ただ

「空から来た」

というのではない。

「この世から出たのではない」

ということです。



イエスはマリヤから生まれたが、マリヤは聖霊の力によってイエスを産んだわけですから特別な現われ方をした。そういうことは普通のクリスチャンでも本当は分かっている。

「イエスのお父さんはヨセフで、ヨセフとマリヤから生まれた」

と、そのくらいに思っているだけのはなしだ。ところが、イエスはそうではない。聖霊によってマリヤを通して現れてきた。これが

「我は上より出づ」

ということ、霊界からやってきたということです。

●霊現の世界

24 之によりて我なんじらは己が罪のうちに死なんと云えるなり。汝等もし我の夫なるを信ぜずば、罪のうちに死ぬべし』

我々はキリストを受けとらないと「罪のうちに死ぬ」というわけだ。肉体は罪のうちに滅びます。これはパウロがローマ書8章で言っているとおりです。

「この故に今やキリスト・イエスに在る者は罪に定めらるることなし。

みんなキリストが十字架で引き受けてしまったから、無罪にされている。

2 キリスト・イエスに在る生命の御霊の法は、なんじを罪と死との法より解放したればなり。

この言葉です。十字架を土台にした御霊の法則が罪と死との法則から解き放して、罪にも死にも支配されなくなつたということです。「肉」とパウロが言っているのは生まれつきの我々の在り方のことです。「霊」というのは御霊に在つての在り方です。

9 然れど神の御霊なんじらの中に宿り給わば、汝らは肉に居らで霊に居る。

キリストの御霊なき者はキリストに属する者にあらず。……

11 若しイエスを死人の中より甦えらせ給いし者の御霊なんじらの中に宿り給わば、キリスト・イエスを死人の中より甦えらせ給いし者は、汝らの中に宿りたもう御霊によりて汝らの死ぬべき体をも活かし給わん。

と凄いのを言っている。そういうこともあるぞと。肉体が滅びても、いわゆる死ぬのではない。正に生きて生きる往生です。新しい霊体をいただいて生きるんです。これもパウロがローマ書で言っているとおりです。

37 然れど凡てこれらの事の中にありても、我らを愛したもう者に頼り、勝ち得て余あり。38 われ確く信ず、死も生命も、

いわゆる相対的な「死も生命」も、

御使も、権威ある者も、今ある者も後あらん者も、力ある者も、39 高きも深きも、此の他の造られたるものも、我らの主キリスト・イエスにある神の愛より、我らを離れしむるを得ざることを。」(ロマ8:1…:39)



これは聖霊の愛、キリストの愛です。だから、十字架にかかって贖罪をしたあと、キリストは必ず霊体として現れるわけです。キリストの「復活」というのは霊体として現れることです。あの復活という言葉は復た活き返ったということではない。復活という言葉は躓きになる。キリストは霊体として現れた。キリストはいつまでも霊体として生きておられる。私は夢の中でそういったキリストにでつくわすことが時たまある。それは凄い。もう、平伏してしまう。夢の現実というのは凄いよ。夢の中の現実普通の現実以上です。いわゆる夢ではない。もう、ありがたくてね。

だから、我々は

「十字架を受けとって、贖罪を受けとって、聖霊を受ける」

というと、これが新しき生命、新生なんです。本当の新しい生命です。この新しい生命は古びない。新しいものはよく古くなる。ところが、この新しいのは古びない。いつまでも新しい。そういうものはこの人間の相対界にはない。本当の新人になる。十字架を受けとって聖霊を受けとった人は、本当の新人だ。内側は本当の新人です、外側は普通の人と同じようだけれども。

私は「信仰」なんていう言葉は嫌いだ。なにも、信じ仰いでいるのではない。現実なんです、霊的現実です。霊の現、霊現なんです。霊的なうつつの世界、霊現の世界です。

●天来の使者

私はキリストのことを「無者」と言っている。自分を何者ともしない。我々も十字架の贖いで、罪からゼロにされている。我々も無者なんだ。無者は聖霊を受けとると、これは無限無量者です。「無即無限無量」とはそのことなんです。本当の無者は無限無量者です。

普通は、そんなことは言わないね。キリスト教界にもそんなことを言う人はほとんど無いのではないかな。佐古純一郎氏が私の『無者キリスト』を読んで、

「真に大胆なキリスト告白だ」

と言って驚いた。柳田邦男氏も私のことを驚いた。一遍、テレビで一席やりたくらいに私は思うんだ、

「本当の世界は、キリストの直弟子の次元はこういうものだ」

ということ。

「霊界から」ということが「上より」ということです。

「自分は霊界から遣わされた者だ」

ということ。キリストは被派遣者なんだ。これが「遣わされたる者」です。ここに「遣わされた」という言葉がよく出てくる。天界から送られてきた者、天来の使者であるということです。

29 我を遣し給いし者は、我とともに在す。我つねに御意に適うことを行ふに



よりて、我を独おき給わず』

キリストは神さまの命令通りに動いている。

「本当のクリスチャンは奴隷だ」

とマルティン・ルッターも言っている。神さまの言うことを、キリストの言うことを無条件に受けとって動いているもの、それを奴隷と言った。奴隷というのは余り感心しない言葉だけれども。ところが、この一番不自由な奴隷が一番自由なんです。本当の自由は、御意によって動いている者が本当の自由です。自分勝手に動いているのは本当の自由ではない。それは自己に捕らわれている。人間は、普通は大いに自由だと言っているけれども、自己というものに拘束されているからダメなんです。自己に捕らわれているのを、身勝手にやっていることを、それを自由だと言うけれども、それは本当の自由ではない。本当の自由は、自分を棄てて、神さまの、キリストの御意のままに動いているのが本当の自由です。ゲーテもどこかでそんなことを言っていたよ、

「普通の人には自由がわかっていない。自分勝手にしているのは、自己に捕らわれている」

と。己を棄ててかかって、神さまの無限無量の自由自在な御意に従っているのが、本当の自由だ。大きな風にのって飛んでいる鳥のようなものだ。鳥が自由なんです。鳥というのは素晴らしい。風にうまく乗って自由自在に動いている。鳥自身にはひとつもあちらこちらに行く力はないのだけれども。風のないときには、鳥は自分の羽でもって一生懸命にやるけれども、それではくたびれてしまう。ところが、風にのついているときには楽なんだ。それが本当の自由です。

だから、無者であることが無限無量者である。何も無いことが一番豊かなことになる。

「無一物無尽蔵」

というのがそのことなんです。大自然と一つになっている。人間は、文明人はいろいろなものを工夫して作ったり壊したりしているけれども、そんなものはひとつも要らない。キリストはやはりそういうことをちゃんと分かって仰っている。マタイ伝の始めの方にでている。

「恵福なるかな、霊の貧しき者、天国はその人のものなり」

というこの言葉にちゃんと入っている。恵福なるかな、霊の貧しい者――

「私は何もありません」

という――それが実は、天国はその人のものである。天国的な現実実はそういう人のものだという。

「恵福なるかな、悲しむ者、その人は慰められん。」

恵福なるかな、柔和なる者、その人は地をつがん」

これは凄い言葉だね。みんなこれは



「神・キリストがそのバックにいるから何も心配は要らんよ」というわけです。

「義に渴く者、その人は飽くことを得ん」

大変な言葉だね。やはり、これは人間の思想ではない。いわゆる思想の言葉ではない。霊的現実から迸りでてくるところの言葉です。

「私を受けとれば、お前たちは世の光だ。」

私を受けとれば、お前たちは地の塩だ」

と書いてある。霊的な権威のある言葉です。教えではない。だから、「キリスト教」という言葉は嫌いなんだ。キリストは全部、本当のことを告白している。教えているのではない。自分の体験していることを言っているだけの話です。その告白に打たれるんです。私の話も全部これは告白です。あなた方に教えているのではない。

ゲーテは、

「自分の文学は全部、告白だ。頭で書いていない。頭でものを言っていない。全部、全身的な告白だ」

と言った。さすがはゲーテだ。だから、ゲーテの文学は凄い。トルストイでもドストエフスキーでもユゴーでもみなそうでしょ。第一級の文人はそうです。あるいは超一級と言ってもいい。そういうことになる、漱石さんなんかを読んでも、どうも底力が足りない。底力というのは、そういう霊的な力ですから。漱石さんあたりはきれいな文学だけれども、もうひとつそこからの底光がない。

キリストは遣わされたる者、神さまの奴隷だという。ルッターが言ったとおり、クリスチャンは「神の奴隷」である。ところが、奴隷が一番自由だ。そういう逆説的な真理が普通の人には分からない。みな自我がたっているから。自我におけるところの自由なんか、自己に捕らわれている。

キリストは正に神さまの特命全権大使だよ。遣わされたる者です。大変なひとです。自由自在に彼が言っているのは全部、神さまからきているところの神意、神言である。神意、神言、神行、そういうのがキリストに現れている。彼は遣わされた者だから。神さまの奴隷だから。ルッターが『奴隷論』を書いたら、エラスムスが『自由論』を書いた。ところが、エラスムスの「自由」はダメなんです。ルッターの「奴隷論」が本当なんです。これが本当の自由なんです。さすがはルッターだ。

身をもつて行じていったところの本当の自由者はアッシジのフランチェスコです。これは凄いね。私は非常に尊敬しています。全部、神・キリストの意志で動いている。ローマ法王をひとつも恐れないで、はつきりとものを言った。ルッターも、

「もし地獄があるとすれば、それはローマの下にある」

と言った。ローマはそれほどの、地獄の上に立っているような非常に偽善的な所だ、罪の



かたまりだと。ルッターはローマの方に向かって行つたときにそういうことを言った。階段（スカラ・サンタの二十八階段）を登っている時にルッターは途中でやめて下りてしまった。無となると無限無量だから、

「ナツシング・イズ・オール」

「ニツヒツ・イスト・アツレス」

と言つていい。

「何も無いことが一切だ」

ということですよ。遣わされたる者が、奴隷が実は最大の自由であるという。神さまの霊的な風にのつかつて動いているのが一番自由だということです。その通りです。

だから、我々は本当の自由をいただいているわけです。何も卑屈になる必要はない。楽でしょうがない、力が来てしょうがない。そういう境地で葉書でも手紙でも書いてもらいなさい。受けとった人が本当の意味で喜んでしまうから。お世辞なんかひとつも要らない。

